

25. 悪る狐三題

星 加 政 敏

※ 大正6年7月6日生、大正11年上藻13号沢に入植。
祖父数太郎は大正6年に先に入地。

狐の火の玉

私たちが狐の火の玉を、初めて見たのは、私が戦地（北支）から帰った年ですから、確か昭和16年の8月頃だったと思います。

その頃、瀬戸牛（西興部）市術の厚生診療所附近に、演武場と言って柔剣道のほかに、映画や芝居ができる建物がありました。

ここで芝居があったので、友達の鈴木勝美君、菅原正友君ら3人で見物に来ました。

終わってから、産業組合のなかに清水さんが、食堂を経営していたので、遅い夕食をとって、さらに、「おやき」を食べ、残りを私の自転車の前にぶらさげて帰途につきました。時刻は10時ころだったでしょう。

一寸先も分らない真暗闇のため、自転車を押して歩いたので、3号の大沢秀雄さん附近まで来ると、時間も遅いので泊めてもらうかと話したが、迷惑をかけるということで思い直して、遅くなっても帰ることにしました。

10号の現在の塩見さん附近では、自転車を押して歩いていたので、12時前後になっていたと思います。現在の道々は、すっかり改良されたが、そのころはまだ昔のまま、塩見さんと池本さんの間の10号の沢は、山手の方に迂回して下りて、急カーブをして向い側に上る悪い道でした。

この近くまで来ると、突然沢の中ほどから、ボンと2尺（60センチ）以上もある蒼白い火の玉が、電柱の高さ位まで舞上ったのです。先頭を歩いていた私は、「出たッ」と思うと、胸がどきんとして立ちすくんだところに、後から来た菅原君が私に突き当たり、そのはずみでこの火の玉を見つけると、

「アラ……」と大声で、声にならない叫び声を上げて驚き、鈴木君も勿論びっくりして、立ち止って終わりました。

舞上った火の玉は、地上の高さに下り、ゆっくりと上、下に波打つようにして近寄ってきます。火の玉は蒼白い色のポウツとしたもので、普通の火のように後光は見えず、本当に薄気味の悪い色でした。

3人は体を堅くして見守っているうちに、火の玉は、5、6メートル近くまで来て、動きが止まりました。

私はてっきり、狐が「おやき」を狙ったなと思ったので、3人で、「おやき」を投げやるかと相談したが、癖になるから止めることにして、火の玉を見守っているうちに、火の玉は、もと来た方に逆戻りして、沢の附近でポツと消えて終わりました。

3人は恐る恐る沢のふちまで近寄って見ると、沢の中を火の玉が、矢張り波打つようにふわふわと、ゆっくり10号の沢の奥に消えて行きました。

それから急に恐ろしくなって、3人ともどうやって家に帰ったか分らぬほどでしたが、火の玉は、3人とも見えたのですから、一体どうしてあんな火の玉ができるのでしょうか。

人さらい狐

私たち一家が、上土別から上藻13号沢に入植して、間もない9月頃でした。私の家の奥隣りに植松さんという家があり、この人は農業を殆どやらずに、馬車で荷上げなどを本業にしていました。家族は植松さん夫婦と、子供が5、6人おり、末の2人は女で、末子は3才、その上は5才で、5才の子は股関節脱臼のため、満足に歩けないほどの「びっこ」でした。

植松さん一家は、この末の子供2人を寝かせて、他の子供たちを連れ、私の家に貰い風呂に来ました。植松さんの風呂は傷んでいたそうです。

皆風呂に入り、雑談に花を咲かせて、植松さんの帰ったのは11時ころだったでしょうか。20分もすると外で騒しい人声がして「星加さん」と女の叫び声がするので、外に出てみると、帰ったばかりの植松さんのおかみさんが、提燈を下げておろおろしているのです。

父が聞いてみると、家に寝せておいた2人の女の子か居ないので、植松さんは中野直喜さんの処へ行って、子供たちが何処へ行ったか神様にみてもらうため、乗馬で出掛けたとのことでした。

それは大変と、家の者も植松さんの家へ行って探してみると、3才の末子は、土間の破れた壁の中に、頭を突き込んで寝ているのを見付けたが、足の悪い5才の女の子が居ないので。家の前の13号の川に落ちたのでないかと探したが見当らない。そのうち何処かで子供の泣き声がするので、父が声を頼りに探しに出かけ、暫くすると女の子を背負って帰って来ました。

私の家の向い側のソバ畑で泣いていたそうで、ここは、急斜面で、丸い鍋の尻のような形をした畑地だったので、私たちは「鍋のけつ」と呼んでいました。この1町歩ほどの畑には、全部ソバを作付けしていて、真白に花盛りでした。

子供は、その畑の上段近い処で泣いているのを見付けたそうです。よく見ると、子供の全身は夜霧にぬれて、身体一面に獣の毛が付いている。父は狐の毛だと言うのです。

その子に、どうしてあんな処に行ったかと尋ねると、「父ちゃんが面白い所へ連れて行ってやる」と言うので、背中におぶさって行ったとのことでした。

平地ですら満足に歩けない子供が、どうやって畑の上の方まで行けたのでしょうか。狐が連れて行ったとしか思われず、何のために連れだしたのか、今でも不思議でなりません。（これは父から何度となく聞かされた子供の時の話で、足の悪い子とは遊んだものである。）

背中に乗る狐

これも、私が13号に居た時、村形惣治さん（昭和23年9月電気事故で死亡）が元気な頃、私の家へ遊びに来たときの話です。

村形さんは夏の或る日、用足しに汽車で他の市街に出掛け、夕方瀬戸牛市街に帰り、塩ますを一尾買って風呂敷に包み、帰途につきました。瀬戸牛小学校前から、急な近道を登って、頂上の掘割り近くまで来ると、肩に何か上ったような気配がし、風呂敷包みが重くなったようなので、肩に手をやると、すっと軽くなる。そんなことを2、3回繰り返すうちに、これはてつきり狐だ、と思いながら頂上を下った大曲り附近で、狐を振り払ってやろうと、風呂敷の結び目を解いて、地上に叩きつけました。

その時村形さんは、風呂敷包みが狐のように思われ、家に帰ってから、しまった、と思ったそうですが、探しに行くにも夜が更けているので思い止まり、明朝人の通らない中にと、早々に峠近くまで探したが、遂に塩ますの風呂敷包みは、見当らなかったそうです。

村形さんは、狐だなど思いながらも、風呂敷包みが、肩に乗った狐だと思い込んでいたのが、既に化かされていたのだったと、昔笑いしておりました。